



屈斜路カルデラが現在の形を見せ始めた7000～8000年前、大噴火で山が消え、大地が陥没して水がたたえられ摩周湖が誕生した。阿寒国立公園のなかでも特に、原始の自然に囲まれた湖は訪れる人の心を捕らえて放さない。夏の湖を覆う変幻自在の霧、霧氷が輝く厳寒期の湖。「神秘の湖」と呼ばれる。周囲をカルデラ壁に取り囲まれた湖面標高は351メートル。湖面面積19・2平方キロとそれほど大きくはないが、水深は211メートルもある。

この湖は不思議なことに、流れ込む川も流れ出す川もないのに水位が一定に保たれている。鍋形の湖は、水が染みにくい岩盤でできているといわれる。そのうえ、水が通りやすい地層が湖面の約1メートル上にあり、外輪山の山肌から流れ込む水がそこから伏流水として流れ出すからと考えられている。

乳白色の霧には2種類ある。地元の人が

私と遺産

自然がくれた財産

「私が摩周湖を意識したのは20歳代半ばです」。摩周湖世界遺産登録実行委員会の会長で、燃料販売業を営む桐木（きりのき）茂雄さん（39）は苦笑いする。

弟子屈で生まれ育った桐木さんに摩周湖は「ごく普通の湖にしか過ぎなかった」。高校卒業後に東京の専門学校で経理を修め、札幌のプロパンガス販売会社に3年勤めてから家業を継いだ。

取引先の人を摩周湖へ案内することになった。「見慣れた摩周湖へ行くのはいやだったが、上司の指示なので」仕方なしにハンドルをにぎった。展望台に立ち、目に飛び込んできた風景とすがすがしい空気に「自分の町にこんなすごい所があったんだと感動。初めて摩周湖を意識しました」という。

桐木さんは、仲間と町の将来を語りあい「摩周湖を核に経済、文化、教育を考えよう」との結論を得た。「そのためには自然の保全が最も重要。摩周湖は自然が私たちに与えてくれた財産。大切に残したい」と話す。

まちづくりと遺産

世界遺産目指し、

ごみ減量に挑む